

# エキノコックス症に関する リスクコミュニケーションの現状と課題

渡邊 克己

キーワード：エキノコックス症、多包条虫、エキノコックス症対策、リスクコミュニケーション

## 1. はじめに

エキノコックス症は、キタキツネや犬等の糞便とともに排泄されたエキノコックスの虫卵が経口的に体内に入り、幼虫となって肝臓などで増殖し、10年以上の潜伏期を経た後、重い肝機能障害などを引き起こす動物由来の感染症である。近年、流行地域は拡大傾向にあり、札幌市周辺の居住者も新規患者として認定されている。これまでの行政主導のエキノコックス症対策は、エキノコックス症の流行を食い止めることが出来ておらず、現状の対策では限界があるといわざるを得ない。

そこで、本稿では、リスクコミュニケーションという概念を取り入れ、それと照らし合わせて、エキノコックスに関する情報が適切に行政から地域住民に伝達されているか、そして地域住民がそれらの情報を正しく認識し、リスク回避行動をとっているかを明らかにした。さらに、エキノコックス症に対する地域住民の認知傾向、エキノコックス症への不安を感じている人、エキノコックス症に対して無知である人などの特徴を明らかにし、それらの結果を踏まえて今後あるべきエキノコックス対策を提示することを目的とした。

## 2. 研究方法

まず、北海道および道内各自治体（札幌市・小樽市・富良野市・小清水町）に対する聞き取り調査を行い、エキノコックス症に対する取組みを明らかにした。

次に、エキノコックス症に関するアンケート結果を分析し、道内各自治体の地域住民がエキノコックス症に対してどのような認識を持ち、いかなる対策をとっているのかを検証した。アンケートの結果は、クロス集計、カイ二乗検定、対数オッズ比による関係性の強さの検討、によって分析した。

## 3. 結果と考察

まず、聞き取り調査から、エキノコックス症対策は、地域間で差があり、エキノコックス流行の歴史の長い市町ほど熱心に行われていることがわかった。

次に、アンケート結果の分析から、エキノコックス症対策のなかでも、「血清検査の受診」の認知度・実施度、「ベイト散布による感染源対策」の認知度が低いこと（特に都市部で）、エキノコックスへの不安がありながらも対策の知識がない人は、都市部（特に札幌市）若年層、居住年数の短い人に多いこと、などが明らかになった。

## 4. 結論

以上の結果より、まず、現在のエキノコックス症対策はリスクコミュニケーションの要件を満たしていないこと（行政側がエキノコックス症のリスクを回避するのに十分な情報を住民に伝えていないこと）がわかった。

そして、アンケート結果の分析からは、今後のエキノコックス症対策では、地域住民にあまり認知されていない「血清検査の受診」、「ベイト散布による感染源対策」をアピールして行くべきであるといえることができる。また、エキノコックス症への不安がありながら対策への知識がないというリスクコミュニケーション上、最も問題のある人を減少させるために、都市部居住者、若年層、居住年数の短いものがエキノコックス症について知ることができるような取組みを進めるべきである。

このような点を踏まえて今後のエキノコックス症対策を行うことで、地域住民のエキノコックスへのリスクは低減して行くものと考えられる。